光森正士先生　年譜および著作目録

年　譜

昭和　六年　五月　九日、尼崎にて生まれる。
昭和二七年　三月　地元の小・中学校を経て兵庫県立尼崎高校卒業。
昭和二七年　四月　大阪学芸大学入学。
昭和三〇年　五月　大阪学芸大学中途退学。
昭和三一年　四月　龍谷大学文学部入学。
昭和三五年　三月　同　文学部仏教史学科卒業。
昭和三五年　四月　同　大学院文学研究科修士課程入学。
昭和三八年　三月　同　大学院文学研究科修士課程卒業。
昭和三八年　四月　同　大学院文学研究科博士課程入学。
昭和三九年　七月　奈良国立博物館学芸課工芸室文部技官。
奈良市史編集委員（美術工芸担当　昭和六三年三月まで）。
昭和四〇年　七月　奈良国立博物館学芸課美術室（彫刻）。
昭和四一年　三月　龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。
昭和四七年一一月　奈良国立博物館学芸課普及室長。
昭和五〇年　四月　橿原市文化財審議委員（美術工芸部門）。

昭和五二年　四月　奈良国立博物館学芸課美術室長。
昭和五三年　四月　大阪府松原市史、美原町史編集委員（美術工芸部門）。
昭和五四年　四月　帝塚山短期大学非常勤講師（日本美術史、博物館学担当　昭和五六年三月まで）。
昭和五五年　四月　財団法人聖徳太子奉賛会評議会委員（東京本部）。
昭和五六年　六月　美術史学会常任委員（西支部　平成五年三月まで）。
昭和五八年　四月　神戸大学文学部および大学院修士・博士課程、非常勤講師（博物館学、日本彫刻史担当　昭和六三年三月まで）。
東大寺勧学院講師（仏教美術担当　平成九年まで）。
昭和五九年　四月　法隆寺求道会講師（平成一〇年まで）。
昭和六〇年　四月　奈良県文化財審議委員（美術彫刻部門）。
昭和六一年　三月　外務省研修所講師（日本美術史、仏教美術担当　平成七年三月まで）。
昭和六二年　四月　奈良国立博物館仏教美術資料研究センター、仏教美術研究室長。
平成　元年　四月　龍谷大学文学部大学院修士・博士課程非常勤講師担当（特殊講義、仏教美術担当　平成二年三月まで）。
平成　二年　四月　鳥取県倉吉市博物館文化顧問。
平成　三年　四月　奈良国立博物館学芸課学芸課長。
姫路市文化財審議委員（美術彫刻部門）。
平成　四年　四月　奈良県御所市文化財審議委員。
奈良県斑鳩町文化財委員。
京都西本願寺文化財管理委員会委員。
平成　五年　三月　奈良国立博物館学芸課学芸課長退任。
平成　五年　四月　奈良国立博物館名誉館員。
財団法人元興寺文化財研究所評議委員。

平成　六年　四月　龍谷大学文学部大学院修士課程講師（文化財研究、美術史担当　平成七年三月まで）
平成　七年　四月　奈良大学文学部文化財学科教授（文化財学研究法、美術史講読、美術史特殊講義、日本彫刻史、日本文化史、美術史演習担当）。
奈良大学大学院文学研究科博士前期課程文化財史料学専攻担当。
平成　八年　九月　文化庁文化財審議会専門審議委員　美術部門。
平成　九年　四月　奈良大学大学院文学研究科博士後期課程文化財史料学専攻担当。
平成一一年　三月　三十一日、肝不全のため浄土へ還る。享年六十七歳。
奈良大学を退職する。

著作目録

著書

仏教史概説（共著）　昭和四四年　四月　平楽寺書店
秘宝　東大寺　下巻（共著）　昭和四四年　九月　講談社　秘宝シリーズ
秘宝　東大寺　上巻（共著）　昭和四四年一一月　講談社　秘宝シリーズ
秘宝　法隆寺　上巻（共著）　昭和四五年　三月　講談社　秘宝シリーズ
秘宝　法隆寺　下巻（共著）　昭和四五年　六月　講談社　秘宝シリーズ
室町時代仏像彫刻―在銘作品による―（共著）　昭和四六年　二月　学芸書林
聖徳太子尊像集（共著）　昭和四六年　四月　法隆寺・奈良県文化財保存課
日本名宝事典（共著）　昭和四六年　五月　小学館

秘宝　園城寺（共著）	昭和四六年一〇月	講談社　秘宝シリーズ
阿弥陀仏彫像（単著）	昭和五〇年　四月	東京美術
山越阿弥陀図（単著）	昭和五一年一〇月	同朋舎出版
新版仏教考古学講座　第五巻　仏具（共著）	昭和五一年一二月	雄山閣
奈良市史　工芸篇（共著）	昭和五三年　三月	奈良市　吉川弘文館
大和古寺大観　第二巻　当麻寺（共著）	昭和五三年一二月	岩波書店
新修　稲沢市史　研究篇二　美術工芸（共著）	昭和五四年　一月	新修稲沢市史編纂会事務局
仏具大辞典（共著）	昭和五七年一〇月	鎌倉新書
日本の文化財（共著）	昭和五七～六二年、平成元年～（毎年三月発行）	日本交通公社出版事務局
大和路かくれ寺かくれ仏（単著）	昭和五七年　五月	講談社
奈良朝写経（共著）	昭和五八年　四月	東京美術
大百科事典（共著）	昭和六〇年　六月	平凡社
国宝大事典　彫刻（共著）	昭和六〇年　七月	講談社
阿弥陀如来像（単著）	昭和六一年　六月	至文堂　シリーズ日本の美術　二四一
日本美術史辞典（共著）	昭和六二年　五月	平凡社
真宗重宝聚英　第七巻　聖徳太子像（共著）	昭和六三年　六月	同朋舎出版
真宗重宝聚英　第三巻　阿弥陀仏像（共著）	平成　元年　二月	同朋舎出版
真宗重宝聚英　第四巻　親鸞聖人像（共著）	平成　元年　二月	同朋舎出版
図説　日本の仏教　三　浄土教（共著）	平成　二年　七月	新潮社
仏教美術入門　第三巻　大乗仏教の美術（共著）	平成　二年　九月	平凡社
仏教美術入門　第六巻　仏教美術のひろがり（共著）	平成　三年　一月	平凡社

正倉院宝物にみる仏具・儀式具（共著）　平成　五年一〇月　紫紅社　正倉院シリーズ第3巻
仏像彫刻の鑑賞基礎知識（共著）　平成　五年一二月　至文堂　鑑賞基礎知識シリーズ
仏教美術論考（単著）　平成一〇年　七月　法藏館

論文

阿弥陀像の造像について　昭和三六年一〇月　龍谷史壇　四八号（龍谷大学史学会）
多武峯常行三昧堂関係資料　昭和三九年　九月　大和文化研究　九巻九号（大和文化研究会）
阿弥陀仏の異形像について　昭和四一年一二月　宮崎博士還暦記念論集　真宗史の研究（永田文昌堂）
伊豆御山常行堂とその本尊について　昭和四三年　九月　大和文化研究　一三巻九号（大和文化研究会）
霧島周辺の仏教美術―仏像・石塔・建築―　昭和四五年一二月　カヤカベ　かくれ念仏　調査報告書（法藏館）
日光輪王寺常行堂本尊宝冠阿弥陀如来及び四菩薩像調査之留　昭和五〇年　六月　日光山輪王寺常行堂本尊調査之留（輪王寺）
比叡山東塔・西塔の常行堂の興廃について　昭和五二年　一月　仏教史学論集（永田文昌堂）
押出仏と仏像型―正倉院の仏像型を中心としてその製作の実験的考察―　昭和五八年　三月　龍谷史壇　八一・八二号（龍谷大学史学会）
塼仏雑想観　昭和六〇年　六月　末永先生米壽記念　獻呈論文集（末永先生米寿記念会）
玉虫厨子内部荘厳の押出千仏像　昭和六〇年一二月　法隆寺昭和資財帳調査概報　伊珂留我　五号（斑鳩町）
仏像の流転―日韓古代誕生仏の諸相―　昭和六一年　七月　大和文華　七六号（大和文化研究会）
倶会一處の蔵王権現像　昭和六二年　一月　古美術　八一号（三彩新社）
河内長野小山田元宮発見の押出如来三尊像について　昭和六三年　九月　網干教授華甲記念論集（網干善教先生華甲記念会）
古代寺院の礼拝空間についての試論―三金堂、二金堂に対する疑問―　平成　二元年　三月　龍谷史壇　九三・九四号（龍谷大学史学会）

親鸞聖人の還化をめぐって　平成　元年一二月　平松令三先生古稀記念論集　日本の宗教と文化（同朋舎出版）

正倉院宝物の仏像型と押出仏　平成　四年　二月　仏教芸術　二〇〇号　正倉院特集（毎日新聞社）

香印坐考　平成　五年　三月　正倉院年報　一五号（宮内庁正倉院事務所）

韓国古代仏教寺院の礼拝空間について―特に礼拝石と奉炉石について―　平成　五年　三月　文部省科学研究費時補助金（国際学術研究）日韓両国に所在する韓国仏教美術の共同研究　研究成果報告書（課題番号02044163）（奈良国立博物館）

古代仏教寺院の礼拝石空間と礼拝石　平成一〇年　三月　文化財学報　第一六集

安陀会について　平成一〇年　三月　網干善教先生古稀記念考古学論集（網干善教先生古稀記念会）

四年間を回顧して

光森　正士

井上正先生のあとを引継いでわたくしが奈良大、文学部文化財学科の教壇に立つことになったのは丁度阪神大震災のあった平成七年の四月である。当時わが家の被災のあとも十分に片付いておらず、心身ともに疲れ果てる毎日を送っていた。はやいものであれからすでに四年の月日が流れている。

東京でオリンピックの開かれた年から約三十年勤めていた奈良国立博物館もようやく退官のときを迎えることになったが、その頃からわたくしの体に変調の兆が起こっていた。体のあちこちに故障が起こり、病院を入退院していた。その頃はいまと違って週休二日制ではなく、日曜以外は毎日片道二時間、往復四時間以上をかけて通勤した。晩年これがかなり骨身に応えるようになっていたのであろう。

退官してやれやれと一息ついていたころに「好事魔多し」のことば通り、大地震が起きた。そしてその四月から学園生活も始まった。このように身辺に大きな変化が生じると、それまでの病院通いや継続的な治療や安静がいつしかおろそかになっていた。しかし、病魔の方は歩を留めることなく、着実に進行していた。いまゝで何の苦もなくやり遂げられた小さな仕事も、手掛けるとすぐに疲れ、長くこれを持続することができなくなった。常に倦怠感を感じ、足腰に痛みを感じはじめた。

平成十年の三月頃からそれが一層ひどくなり、家の近くで診療所を開いている中学時代からの友人に診察してもらった。彼の曰く、「君、以前よりだいぶ悪くなっている。どうして通院を怠ったんだ」と叱られた。実は彼の医学部の先輩で名医として誉れの高い専門の医師に紹介され、その大学病院へ入院したり、通院したりしていた。しかしその病院は少し遠い。

仕方なく彼は別の病院へ紹介してくれた。〝持つべきものは友〟と感じ、彼のいう通りに従った。別の病院へ行くことは病状の検査が一から始められ、ここも悪い、かしこも悪いと指摘され、「しばらく入

院し、安静にしなさい」と若い主治医から宣告された。それは六月に入っていた。毎日病院の白い天井を眺めつつ、先ず三週間が過ぎた。退屈な日々であった。

ひと頃九〇キロ近くあった体重もみるみるうちに七〇キロ台に減った。入浴して鏡に向い「あゝ痩せたなあ」と思わず口からでるようになった。

第一期は三週間の入院で、第二期は二週間いずれも検査入院である。平成十一年正月には第三の入院がわたくしを待っている。

入院中も、退院してからもいつも心にかかるのは、来春卒業する学生諸君の卒論である。「あゝ、いまが大事なときなのになぁ」と自分の不甲斐なさを悔んでいた。

大学院生の卒論も心にかかり、古原先生や岡田先生がおられたらなぁと勝手な思いをしたりもした。通常の停年期を過ぎると、病を得たり、またいろいろ故障が起きたりするもので、お互いに何とも致し方がないことだ。

水野学長はじめ文化財学科の先生方のご配慮を得て後期の授業の分担、肩替りをしていたゞけると聞いてほっと安堵し、感謝した。

しかし代替のきかぬ大学院の講義だけは何とかならぬかということで、前期の補講もあって、水曜日にこれをまとめて実施することにした。

病気のせいではあるが出勤当日は何とか事を終えて帰るが、その翌日になると非常に疲れを感じ、これをいやすのが大変である。連日朝から晩まで体を休め横になっている。

思うにわが文化財学科の学生諸君は総じて気質が温和で、実に素直である。理解力にすぐれ、また努力をおしまない。だから最後の一年間これらの学生諸君の要望に十分応えられなかったことを頗る心苦しく思っている。

まだ健康がさほど悪化していないと思われるはじめの三年間は実に楽しく過ごすことができ、それぞれに想い出も深い。

「ゼミ旅行」と称して平成八年三月に十日間ほど韓国に行き、その名刹や古寺遺跡、あるいは博物館など訪れ、楽しい旅ができた。このとき若者のたくましさ、旺盛な食欲などに驚かされ、大学では見ることのできない一面を垣間見る思いがした。学生諸君も韓国に対する認識が大きく変化したことであったろう。

次いで九年の三月に、今度は文化財学科全体の研修旅行として中国に渡り、竜門石窟をはじめ天龍山、雲岡石窟などの三大石窟寺院、また道綽や善導が住んだ玄中寺、二つの大塔の立並ぶ双塔寺、紫禁城、天安門広場などを見学した。中国の現在を学び、その食事も十分に味合った。海外旅行がはじめての家内も同伴し、彼女の友人たちも何人かこれに混ざり、また文化財見学を好む医師までこの一団に加っても

平成八年度文化財学科海外研修旅行　龍門石窟にて　1997. 3. 7

らい、大いに安心した旅が続けられた。

翌十年三月から先述の体調異変に見舞われた。強いことで有名なある横綱が、わたくしにはまだまだ若いと思われるのに引退を表明した。その理由を涙して語った。「体力の限界」とのみ語って彼は土俵を去った。わたくしなどもう古稀（七〇歳）に手のとどくところまできている。自分から体力の弱くなったこと、持続的に仕事をすることができなくなり、同じようなことばが思わず口から出ても当然かと思う。

若い学生諸君と語らいをもつことは好きである。そのとき我が身にはすでに失われている体力は勿論、若い新鮮な感性、新しい表現力、いわゆるバイタリティに対してのうらやましさは限りない。ただ欠けているものといえばそれは経験の足りなさである。

つね日頃、わたくしは「学問や研究はお互いに楽しみながらやろうじゃないか」といい、高校時代までの「勉め強いられる時代は過ぎている。」とも語った。学問の世界、研究の世界では「閃きというものが大切である。日頃の努力でこれが生まれてくる。しかもそれは頭脳ばかりでなく、体全体からも生まれてくる」ともいってきた。このことばの意味をいつの日か、誰かが会得してくれたらうれしい。

遠く関東（千葉）からこの大学へ入学し、すでに卒業した女子学生が、陰で「先生のことを奈良のお父さん」と呼んでいましたよと、そ

の友人から聞いた。「何だお父さんか、お兄さんじゃないの」いったら、その学生はゲラゲラ笑った。しかし大いに照れくさくもあり、そんな風に思っていてくれたのかと、うれしくもあった。

与えられた在職年限、その任務を病のためとはいいながら十全に果たすことのできなかったことは、まことに慚愧に耐えない。どうかご勘弁下さるようお願いしたい。今後は奈良大で味合ったいろいろなことを楽しい想い出として、深く心に秘めつつ静養の日々を送りたいと思っている。

わたくしを育ててくれた恩師石田茂作先生は奈良の博物館長となって東京から奈良に来られたとき、かの熊本藩主細川護立候より一枚の色紙を頂かれた。それには「絶学無憂」の四文字が麗筆で書かれてあった。石田先生は茶目気を出して細川候に「学を絶てば憂い無し」ですかというと、細川候は「君はそう読むか」といささかご機嫌斜めであったという。しかし、勿論この四字の真意は「学を絶たずは憂いなし」であること存知しておられたのではある。石田館長が嫌だ嫌だと駄々をこねて、奈良への赴任を断った石田先生への餞別のことばである。その石田先生が奈良を去るに当り、今度は「深藏如虚」と書かれた楽焼の大皿を頂いた。「深く蔵して虚しきが如し」と読むのであろう。いまもこれを大切にしまっている。

ところでこのような気のきいたことばのひとつも学生諸君に贈ることができればよいのだが、才能のないものの悲しいところである。そこで無理して先述したように「閃者救学」（閃きは学を救う）とでも申し上げ、惜別のことばとしたい。どうか頑張って下さい。

「文化財学報」の第十七集は、わたくしへの送別論集としたいから、何か一篇の論文とそれに略歴、研究歴、また写真などを掲載したいと編集子から要請をうけた。しかし今のわたくしには新たに論文を書く元気はない。どうかご勘弁いただきたいと断った。しかしただの四年間という短い在職であったけれど想い出としてのよしなしごとならと、つまらぬことは重々承知しながら一文を草することにした。

どうかこんな次第ですので悪からずご寛容を賜りたい。